

Newsletter

SEP. 1998

http://www.from.co.jp/aack/

「梅里雪山」

八月七日午後骨灰、

遺物交接儀式

岩坪 五郎

牛田ら、李致新ら、張俊らの梅里雪山遭難隊員遺体・遺品収容隊は、八月六日早朝から、雲南省大理の近くの下関火葬場で遺体、遺品の整理と火葬を行い、骨灰、遺物交接儀式の準備をした。

多くのテレビ陣に包囲され、爆竹が炸裂するなか、全員で黙祷の後、李致新、張俊、岩坪、広瀬隊員父君がそれぞれ挨拶し、中方隊員から日方家族に、日方隊員から中方家族に遺骨と遺品が手渡された。ある新聞は、「雪山依然在、勇士乘鶴去」と報道した。

以下は、その時の広瀬隊員父君と岩坪のスピーチを中国語に翻訳したときの原稿である。

「広瀬栄治さんの挨拶」

本日は中国登山協会代表李致新先生、雲南省体育運動委員会代表張俊先生並びに日本京都大学学士山岳会代表岩坪五郎先生その他関係各位の列席を仰ぎ、梅里雪山登山隊員の火葬式をかくも厳

肅に執り行っていましたことを家族一同厚く御礼申し上げます。

遺体発見のニュースに接しましたその時は、こんなに早く見つかる筈がないのにと耳を疑いました。しかし、もし五〇年先、一〇〇年先であったなら、私たち家族は勿論、同僚や先輩たちは、ここに参列することが出来なかったと

思いますと、皆が元気なこの時期に見された事は大変幸いであつたと存じます。

それにしましても、遭難者の諸物件の発見、それに引き続いての捜査、收拾さらに運搬作業は特に厳しい高山のために、非常に難航を極めた事と推察致します。

検証・梅里雪山遭難

17人の登山者、日本の登山者、中国の登山者、梅里雪山遭難の真相を明らかにする。中国登山協会代表李致新先生、雲南省体育運動委員会代表張俊先生、日本京都大学学士山岳会代表岩坪五郎先生、梅里雪山遭難の真相を明らかにする。



梅里雪山は、中国と日本の国境にまたがる。この山は、登山者にとって非常に危険な山である。梅里雪山遭難の真相を明らかにする。

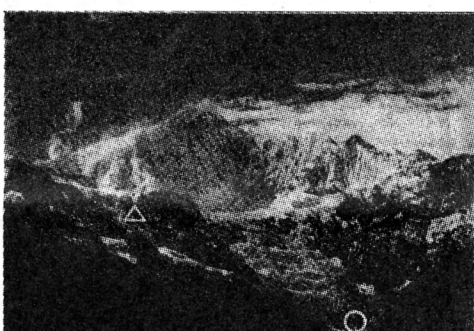
「就寝中に雪崩」ほぼ確定

水河の流れ、予想外に速く

アルプスの水河で、このように速い水河は、登山者にとって非常に危険なものである。梅里雪山遭難の真相を明らかにする。



遺体は寝袋に入ったまま



梅里雪山の地形（京都大学学士山岳会提供）。△印（字前の）の場所から遺体が発見された。この山は、登山者にとって非常に危険な山である。梅里雪山遭難の真相を明らかにする。

果敢に、その作業に当たっていた皆さんのご苦労に心より感謝申し上げます。又、その捜索、収拾活動に万全のご支援をいただきました中国登山協会、雲南省体育運動委員会、京都大学学士山岳会の関係各位に対し、重ねて感謝の意を表したいと思います。

誠に有難うございました。

尚、残る隊員たちも引き続き発見されることを期待致します。

つきましては、中国の皆様にご面倒をおかけする事になると思いますが、今後共よろしく見守っていただきます様、お願い致します。

終わりに日中合同登山隊員一七名の冥福を祈りまして、私の挨拶に代えさせていただきます。

日中家族団代表 広瀬栄治

【岩坪五郎の挨拶】

本年七月一八日に明永氷河で登山隊員の遺体、遺品を発見したとの報をうけた雲南省体育運動委員会弁公室張俊主任は、その旨を中国登山協会に連絡するとともに直ちに現地に急行しました。中国登山協会の陳尚仁国際交流部長は昆明に赴き、全体的な状況の把握を開始しました。

中国登山協会は李致新副主席を隊長とし、京都大学学士山岳会は牛田助教を隊長とする遺体、遺品収容隊を組織し、昆明で張俊主任を隊長とする収容隊と合流して現地に向かいました。

収容隊の現地到着と同時に天候は悪変して、降雨が始まり、氷河の状況は凶悪となりました。遺品、遺体は氷河上、幅約一〇〇メートル、長さ五〇〇メートルに散乱し、その収容は困難を極めま

した。しかし、収容隊員は、今は亡き戦友たちを思い、またその家族のために一言の不平を漏らすことなく、文字通り懸命の収容作業に従事しました。その結果、日中一七名の遭難隊員中一三名隊員の遺体または遺品を収容しました。

ここに私は日本京都大学学士山岳会を代表して、今は亡き戦友たちへの友情に満ちあふれ勇敢に行動した収容隊員たちを心から賞賛するとともに、彼らを仲間としてもつことを光栄とするものであります。

また、日中の家族の方々は、夫を、子息を失った断腸の思いに耐え、我々の行動を支援し、協力してくださいました。心からの尊敬と感謝の意を表すものであります。

ここに亡き戦友たちの冥福を祈るとともに、日中登山家いよいよの友情の発展を願って、ご挨拶と致します。

京都大学学士山岳会代表 岩坪五郎

【後記】

再度遺品、遺体発見の報に接し、現地に向かった牛田と山田は、徳欽県の林文生隊員の遺品を発見した。現在、遺品、遺体ともに発見されていないのは、井上治郎隊長、佐々木哲男秘書長、清水久信医師の三名である。

チヨゴリザ初登頂四〇周年記念 バルトロトレッキング

平井 一正

今年は一九五八年にチヨゴリザが初登頂されてから四〇年目にあたる。このためにいろいろな行事が企画されているが、本トレッキングもその一環であり、バルトロ氷河をさかのぼり、四〇年ぶりにチヨゴリザを望見しようというのが主目的である。残念ながら当時の隊員で参加者は私一人になってしまったが、天候に恵まれ、初期の目的を達成することができた。隊の構成は、AACK六名（平井、酒井、井上、新井、高野、前田司）、山岳部OB二名（青野、古瀬）、学習院山岳会関係四名、その他三で全員で一五名、うち女性五名である。平均年齢は六〇歳、関東からの参加者は五名であった。インド・パキスタンの核実験で実現も危ぶまれたが、状況が沈静化して事無きを得た。以下簡単に報告する。

八月三日、成田空港から出発。同日二〇時一五分、イスラマバード着。今回JACC京都支部会員サジャーードの推薦もあり、現地旅行社としてWajis Adventure Pakistanを使った。ここが入国から出国まですべて世話をしてくれる（価格はホテル、ポータ賃、食費、ジープ代、すべて含んでひとり一七三五ドル。ただし一〇人から一五人の場

合、一人は無料)。翌四日は観光省でフリーフィング。四〇年前にチヨゴリザに登ったというと係官は大仰に目を丸くしておどろいてみせた。フランス人二名ブロードピークで行方不明の電話が入る。

五日、空港に五時三〇分に行く。小雨が降っていたが、スカルドまでロビンが飛んだ。ナンガバルバットからはるか遠くを飛ぶが、それでもこの山をみると興奮する。私はすでに七回目の見参であるが、いつもあの長大な尾根をひとり突き進んだヘルマン・ブルに限りない尊敬を覚える。スカルド着八時。昔砂塵をまきあげていた空港も、ジェット用の滑走路が別にできて、管制塔もある。バスでK2モーターへ。二〇年ぶり、四回目のスカルドであるが、すべては変わった。昔泊まったレストハウスを探す、改築されたのか結局わからなかった。変わらないうのは悠々と流れるインダスの流れとそれを取りまく山々だけである。それでもシエルピカンリのときのハイポータアサッドや、亡きオラムラースルの息子モハマッド、旧知のポータなどが会いにきてくれたり、またホテルの門番の口から、昔レストハウスにいたロジというコックの名前がとびだしてくるなど、私は帰ってきたという感慨に浸った。しかし仲のよかったマホマッド・アリやオラムなどは他界したとの悲しい知らせもあった。

ガイドのアリ・ムラッドに、ぜひ明日出発できるようにポータの手配をたのむ。飛行機が飛んだために、予定より一日はやく着いたので難しいがやってみようと言ってくれ、結果的には実現した。あとで分かったのだが、実はこの一日の繰り上げ

のために、チヨゴリザを見ることができたのである。

六日(曇りのち晴)七時半四台のジープに分乗して出発。ポータたちは一台に二〇―三〇人くらい詰めこまれてすでに先発している。ポータの数は七〇人。見覚えのある風景が次々に展開する。しかし四〇年という歳月は大きい。木々は成長しかつての街道はその印象をかえている。タツソ、チャップのあたりになると、記憶がたどれない。ザークで渡ったところも立派な橋がかかっている。道中すべてかなりの悪路でジープでないと通行不可能である。そして四時終点のトンガルに着く。ここはチヨンゴとアスコレの中間であり、昔の遠征隊はここは通らなかった。昔六日かかった行程を、わずか九時間弱でできたわけである。隔世の感がある。キャラバンのシステムはガイドのアリのもと、実に効率的に進行する。ポータへの食料の配分、賃金支払い、テント設営、食事調理などすべて。メステントにはイスとテーブルが用意され、トイレテントもある。サーブは何もしないでいい。昔とは大違いである。

七日(晴)毎朝モーニングティと洗顔用のお湯の支給がある。六時三〇分出発。アスコレ七時半、村人の着ているものも、昔のボロ同然のものから原色のこざっぱりしたものに変わった。女性も子供も我々を見ても逃げない。かえってハローと話かけてくる。村人と話しているとチヨゴリザのハイポータ、マハンが存命とわかり、彼の家を訪問する。病気で寝ていた(帰途もう一度薬をもつて訪問したが、元気になっていた)。年はとつたが、当時の隊員の名前をすべて覚えていた。残

念ながらシエルピカンリのときのハイポータ、ラマザンはすでに死亡していた。コロフォンで昼食、ここからジュラまでは遠かった。すぐそこに見えるテント地になかなか着かない。チュモルド川にかかっていた藁や木の枝で作ったロープブリッジは今も無く、二一三〇メートルほど下流に、立派な木製の吊り橋に変わっていた。合流点より二キロメートルほど上流にあたる。その橋を渡るのにひとり三五ルピー(二ルピー=100円、コロフォンの橋一〇ルピーも含む)を請求される。その橋守りがなんとチヨゴリザのハイポータ、プロツコフセインである。彼もまたよく隊員の名前をおぼえていた。テントに着いたのは五時半。この日大半の隊員がはげしい下痢に悩まされ、特にGは下痢の他に嘔吐をくりかえし、最終隊員が着いたのはかなりおそかった。特にAはふらふらでもうすこしでブラルド川の激流にとびこみそうになるのを、後ろを歩いていった隊員がかるうじて止めたというハプニングもあった。アスコレの村はずれで狭心症を引き起こして倒れたTと、岩場の巻き道でバランスが悪く前途が危ぶまれたSの二人(共に女性)には、ここから引き返してもらい、ギルキット、フンザあたりを観光してもらうことにした。

八日(晴)今日下山するふたりにアシスタントガイドのシェールがついて下りることになった。アリがシェールを納得させたが、はじめは泣いて抵抗したという。下痢組はまだ回復せず、ピッチはおそい。対岸のチンカン谷は一度行ってみたいところだ。これは四〇年まえからの思いである。バルドマルには軍のベースがあり、物資が貯蔵さ

れていた。ブラルド川に沿ってヘリが低い高度で上流むけて飛んでいた。暑い日であった。下痢のAの荷物をMがかつぐ。Mは五四歳でこの隊では男性最年少であるが、チヨゴリサの桑原隊長の年齢である。彼は終始元気であり、へばった人の荷物をよくかついでくれた。バイユビークからの氷河の融け水が濁流となって、徒渉するところがあった。アリが手をさしのべて助けてくれる。つめたくしびれそうな水につかって、アリは全員の徒渉を献身的に助けた。そのために彼は最後にはふるえがとまらなかったという。出迎えのポーターに荷物を持ってもらいバイユ六時二〇分。心配していた緑もまだ健在であり、ヒマラヤグリーンクラブの植林も順調のようだ。

九日(曇り一時雨)一日休養。

一〇日(晴)一日の休養で大半は下痢が回復した。バルトロ氷河の右岸から氷河を登る。Nが捻挫しておくれがち(帰国後骨折と判明)。氷河の上は起伏がはげしく、アイスカッティングが必要な箇所もある。アリは献身的にリードする。

彼はフンザの出身でバツラ(七六、独)をはじめキンヤンキシユ、ブマルキツシュ、G4など各国の登山隊にハイポータとして参加し、八二年からMajlisにガイドとして勤めている。ウルドゥ、ブルシヤスキー、シーナ、バルテイ、パンジャビ、ククール、プシュート、のほか、英語、ドイツ語など一〇か国語がしゃべれる。誠実な男で、いかにサーブスしたら客がよろこぶかをよく考えている。私は毎日彼とウルドゥ語をまじえた会話をするのが楽しみであった。

リリゴ着一二時四〇分。このキャンプ場も変わ

っていた。当時ポーター連中とトラバースに興じた岩場は、土砂崩壊で砂の下となっている。すぐ前のバルトロ氷河の上には深い峡谷が出現し、当時平坦であったことも信じられないほどである。この泊り場は落石などの関係であまり推奨されないが、アリと相談のうえ、皆の高度順応も考えてここにきめた。

一日(曇りのち雨)夜い月であったが、明け方に雨がふった。しばらく左岸を高巻くルートがついている。そこからみおろすバルトロ氷河はたしかにやせている。リリゴ氷河の横断も起伏がはげしい。ウルドカスの前の氷河も峡谷や大きな氷河湖ができて、様子が変わった。ウルドカスも変わった。マラー二の落書き「チヨゴリザ参道」は跡形無く消えていた。ここにも軍のベースがあり、連絡用の電話線が氷河の上に無粋にのびている。

二日(快晴)皆の調子もよくなってきた。六時一五分出発。G4、プロードピーク、マツシャールムが快晴の空に美しい。昼食後、会いたいと思っていたオラムラスールの次男のナビに会えた。父にそっくりなのでアリに教えてもらうまでもなく、すぐにわかった。彼はいまイギリス隊のガイドをしている。今回は多くの旧知にあえて嬉しい。ゴレのキャンプ地の近くにやはり軍のベース。インドとの国境も近く緊張しているようだ。ゴレのキャンプの正面は、その昔トレースしたところのあるピアンジュ氷河である。いまはバルトロ氷河の状態が悪く、ここからはとても横断はできそうにない。

一三日(晴)Fが夜半すぎから呼吸困難になり、

ここから下山してバイユで待ちたいという。ポータをふたりつけておることになった。ポータからお湯をもらってあとは持参の即席ものでなんとかすごすことにしてもらった。余分のコンロがないためである。

氷河の上は各国のトレッキングパーティーでにぎやかである。イタリア、フランス、イギリス、スペインなど。コンコルディア着一二時。なんと多くのいろとりどりのテント村か。まさに夏の潤沢である。氷河の起伏もはげしく、昔の静寂、荘厳な雰囲気はない。しかしK2はあいかわらず山の中の山、我々を圧倒する。バルトロカンリのかなた、加藤泰安さんらが初登頂したコンダスピークがよく見える。当時キャラバンを続けて、スカルドから二〇日はかかった。今はその半分の日数で来れる。ポータのトラブルなどの苦勞もない。食事も格段に上等である。贅沢になったものだ。

一四日(晴)テント村をぬって七時二〇分出発。モレーンを移るところに固定ロープとジュラルミン製の三メートルほどのはしがあり、ここを先行パーティーのガイドの助けも得て通過する。アリは実に巧みにステップカットを作る。これは軍の装備だそう。あとは平坦なモレーンをただ歩くだけ。チヨゴリザはなかなかみえない。頂上に雲がかからない間に行きたいと焦る。YMが不調を訴え、ここで待つという。一二時やとチヨゴリザの全貌が見える。ここでビスケットとオイルサージンの昼食。

私は実に四〇年ぶりに昔の恋人に会った。アイズドームからの危険なナイフリッジの下降、そして頂上への長大な尾根の登攀など、昨日のことの



ようによみがえる。当時の貧弱な食料、装備でよくこの大きな困難な山に登れた、それは टीमワークの力以外の何者でもなかったことを痛感し、当時のすばらしい仲間をしのんだ。そして力あるかぎり、年齢相応のパイオニアワークを続けたいと願った。チヨゴリザを見て、困難に打ち勝つことの大切さを再認識し、新しい希望を得たことは何者にもかえがたく嬉しかった。五時二〇分帰着。ちょうど一〇時間かかった。

一五日（雨）周囲の山は雪をかぶっているが、コンコルディアは雨。顔を腫らす者二、三人。

一六日（雨のち曇り）朝から小雨がばらつき憂うつな日である。思い残すことなく、コンコルディアをあとに帰途につく。昨夜イギリス隊三〇人のうち、二三人が嘔吐と下痢で特に二人はポータにかっがれて下山したという。あきらかにキチン

テントの衛生上の問題とアリは言った。昼食時にも雨はやまず、それでもわがキチンクルーはピニールをはるなど精いっぱいサービスしてくれた。ゴレにテント。二時半。

一七日（曇り後晴）ウルドカスで昼食。クルプセで泊まる。ジュラにもあったが、ここにもコンクリート製の立派なトイレがある。バルトロの水は汚染されていて飲めない。

一八日（晴）バルトロ水河ともお別れ。暑い日であった。ひるには冷えたアンスのジュースがでた。生のアンスをどこから手に入れたのだろう。卵も毎日欠かしたことはなく、どういうように保存しているか、優秀なコックであった。パイユではFに再会した。我々の情報はポータたちによって詳細に伝えられていた。もぐりでこの地域に外国人が立ち入れないのもこういうシステムがあるからであろう。

一九日（晴）パイユジュラ。パイユを出てすぐの渡渉に心配していたが、減水のため渡渉はなく、一同ほつとする。バルドマルで昼食。あとは暑い日差しの中をジュラまで。

ここで食事を紹介しておく。朝はオムレツ（または卵やき）、トースト、チャパティ（または油であげたプラタ）、ジャム、昼はヌードルスープ、マカロニ、ビスケット、オイルサージン、ナッツ、夜は生姜をきかしたスープ、にわとりの足と肝の油いため、サラダ、とりか羊のカレー、ライス、大豆のカレー、そしてデザートにゼリーかプリンがつく。キチンクルーはコック長ハマユーンを頭にアシスタントコック二名で、それに水くみなどの助手が一―二名。実に手際よく、衛生にはよく

気をつかい、ライスははじめはばさばさであったのが、やがて日本のライスにするなど、よくやってくれた。私はいつもチヨゴリザのときの粗末な食事を思い出し、当時もうすこし食料係としてできることはなかったか、桑原隊長にすまないことをしたと後悔していた。

二〇日（晴）ジュラーコロフォン。チュモルド川の増水のため、大きな高巻きをした。朝出発のときにザイルを肩にアリは皆の無事を祈っていた。それほどこの高巻きは岩登りが主であり、危険なものであった。しかしポータたちの協力で固定ロープを張るなど、全員無事に通過した。コロフォンの緑にかこまれた泊り場で隊員に精気もどった。

二一日（晴）コロフォントンガル。一二時着。旅は終わった。お互いの健闘をたたえて握手。午後有志でチヨゴ温泉に。昔の温泉は涸れたのか見当たらなかった。

実は私はひとり、その後のウルムチ行きの飛行機の都合で急遽ここからスカルドイイスラマバードと急行しないといけない事態になり、心残りであったが、四時あわただしく皆に別れを告げた。スカルドには一〇時についていたが、シガール川の対岸の村々の電気の明かりが幻想的であった。

今回のトレッキングを反省すると、バルトロ水河の現状と隊員の体力から、チヨゴリザのBC付近まで行くというのが精一杯であった。初期の目的達成という意味では一応成功ではあったが、しかしひとつのピークもふまないというのは心残りであった。今回で現地の情報などもわかったので、次回には登山を目的とする隊も作りたい。

ヒマラヤ文献目録が できるまで

薬師 義美

私の趣味は高校時代からはじめた山登りです。すべては、そこから始まりました。時あたかも、ヒマラヤが黄金時代を迎えた時期でありました。一九五〇年のフランス隊のアンナプルナ、五三年のイギリス隊のエヴェレスト、五四四年のイタリア隊のK2など、そして五六年の日本のマナスルの初登頂が続きました。それらの登山の報告書も次々に刊行され、もともと本が好きな私は熟読しました。そして、北アルプスの北部をホーム・グラウンドにしつつ、いつかは自分もヒマラヤへ、という思いを強くしていました。

一、GJとの出会い

ヒマラヤの文献を読んでいると、引用・参考文献に“Geographical Journal”、略してGJがよく出てきました。ロンドンのRoyal Geographical Societyの機関誌です。それが大学の学部を終わるころ、第一巻(一八九三年)から大揃いのセットで学科研究室に購入されました。もちろん、登山に限れば、イギリスの伝統ある山岳会(The Alpine Clubの“Alpine Journal”があり、また時代は新しくなるものの、ヒマラヤ中心にはThe Himalayan Club(インド)の“Himalayan Journal”があります。しかし、どちらも戦前の号が自分の手元にひとつもありませんでした。

およそ六〇年分の、ひと山もあるGJを前にし

て、これは千載一隅のチャンス、製本前に複写しようと考えました。当時、調べたところでは、GJのコンプリート・セットはわが国の大学・研究機関のどこにもありません。また、複写機はいまのようなものがまだなく、マイクロ・フィルム化することになりました。そこで全巻に目を通し、関係記事のリスト・アップをしたら、約四〇〇〇ページになりました。これは数か月かけてマイクロ化しましたが、のちにGJのバック・ナンバーがRGSから入手できたため、後年、このフィルムは他人に譲りました。一方、関係記事の一覧リストを自分一人で楽しむには惜しいと、自分でタイプ謄写印刷し、山の関係者に配布しました。最初は一九五九年一月で、B5判二〇ページ。次いで六〇年六月、五二ページに増補改訂して、国内外の有識者に二〇〇部を送りました。タイトルは次のようです。

“Selected Index of Reports on Himalayan, Tibet, and Central Asia to the Geographical Journal: Vol.I(1893)-Vol.I25(1959)”

続いて、HJの総目次と索引を大阪の故諏訪多栄蔵さんと共編で作成しました。

“Contents and Index to the Himalayan Journal: Vol.I(1929) to Vol.21(1958)”

(一九六〇年八月、B5判七二ページ、タイプ謄写印刷、二〇〇部)

そのあと、A Jの索引も予定しましたが、これには総合索引が数冊刊行されており、バック・ナンバーも容易に入手できることがわかったので、やめました。しかし、G JやH Jの索引はヒマラヤの研究者に大いに喜んでもらい、当時の碩学た

ち、スイスのM・クルツ、G・O・ディーレンフルト、スイス山岳研究財団などから、礼状や文献が送られてきました。

二、九山山房

GJのインデックスを作った五九年に、初めて故深田久弥さんのお宅を訪ねました。初対面の若僧にもかかわらず、旧知のごとくに遇してもらい、ヒマラヤの話、本の話が大いにはずみしました。それ以来、上京するたびにお邪魔することになりました。お伺いするたびに蔵書が増えて、書斎兼応接間は、ヒマラヤや中央アジアの本で床が抜けそうになっていきました。最後には、とうとう庭の一隅に、深田さん自称の「ウナギの寝床」風の『九山山房』が作られました。このライブラリーは深田さんの没後、洋書は国会図書館に収蔵されました。いまでは『日本の百名山』の深田さんですが、私たちにとっては、『ヒマラヤの高峰』の「久(九)」「きゅう」さんです。

山岳雑誌『岳人』の関西編集分室であり、ヒマラヤ研究家の諏訪多さんのところには、ドイツ・ヒマラヤ遠征隊(Willy Merkl)編集の目録『Himalaja Bibliographie (1801-1933)』(ミンヘン、一九三四年)がありました。文庫判、四八ページの小冊子で、図書・雑誌記事・地図を合わせて八〇〇余点を収録していました。これを下敷きに、諏訪多さんは戦前の雑誌『探検』に「ヒマラヤ山岳文献抄」をAからM項まで、日本のものを加えて四六七点、くわしい解説をつけて紹介されていました。N項以降は雑誌廃刊のために完結しませんでした。

諏訪多さんや深田さんのところに出入りしてい

るうちに、雑誌よりも単行本が一番だと思うようになりました。もちろん、収録・報告を雑誌に書いても、本にしない人もたくさんあります。A Jの索引をやめた私は、ヒマラヤの登山と探検を中心に、チベットと中央アジアを加えたリストを作ろうと、つぎに考えました。自分の手元には原書がないという悔しさもありました。そして、B 6のカードに記録をはじめました。六二年には深田さんの九山山房に泊まり込んで、全蔵書の調査をさせてもらい、そのあとは、奥さんの手書きで新入荷の本のリストを送ってもらいました。外国の山岳、地理学関係の雑誌からも書評・図書紹介をピックアップし、六四年にはカードが一六〇枚になりました。すると、深田さんからは、それを一冊の目録にしてほしいな、と時どきいわれていました。

三、『ヒマラヤ関係図書目録』

そのうちに自分自身に火がついて、六五年と六九年の二度、ネパール・ヒマラヤに出かけ、文献調査は中断。カードはロッカーに放りこんだままになりました。遠征の準備と後始末、報告書の刊行と、カードを目録化する時間がまったくなくなったのです。

ところが、一九七一年三月深田さんが登山中に急逝されました。その報を耳にして「しまった」というわけです。遅きに失したけれどもと、たまたまいた数年分の資料を整理し、一気に目録の作成に入りました。山に関係する二、三の出版社に当たりましたが、どこも駄目で、結局は自費出版することにしました。いまのようにワープロがなく、自分でタイプライターをたたくことになりま

す。英文タイプを独・仏語もできるように改造し、リボンがプラスチック・フィルムを使い、和文は本職に写植、貼り込みをしてもらって、原稿をそのままオフセット印刷しました。また、やるからには、わかるものに英文解説をつけ、邦文図書には英訳を併記して、世界に通用させようと考えました。

資料の整理に一〇か月、タイプに一〇か月。発想してから一二年にして、ようやく七二年の年暮れにB 5判、三四三ページの私家版を完成させ、深田さんのご霊前に捧げることができました。欧文図書は約一九〇〇点、邦文は約二五〇点を収録しましたが、当時の情報事情と自分の語学不足から、ロシア語と中国語の文献は最初から除外していました。範囲は自分の趣味から、ヒマラヤを中心にチベット、中央アジアの登山と探検をもっとも重視しました。しかし、私には書誌学とか司書学的な素養はなく、まったくの我流の目録です。専門家の方々からすれば、笑止千万なものであろうと思いました。いずれにしろ、終わってみると、指先が腱鞘炎になったような感じでした。

心配した頒布（送料共で三五〇〇円）は、山の友人たちの支援で好調でした。欧米の山岳書店、大学、研究所、図書館からも直接に注文がきました。国内では国会図書館の納本リストに掲載されていたのですが、国内の図書館はT 県立図書館の一件のみ、数ある大学関係はゼロです。しかし、印刷した五〇〇部も半年ほど出てしまい、黒字になって道楽冥利に尽きるというものでした。

四、ついで『ヒマラヤ文献目録』

できあがった目録を見直すと、ミスタイプが気

になります。また内外の友人・知人が何枚もの追加・訂正リストを送ってくれると、さらに気が滅入ってきました。なかには、早々に改訂版を、という友人もいましたが、印刷と製本だけを業者にまかせ、あとのすべてを一人でやるのは、たいへん辛ンドイことです。それで、もうやめたと宣言し、カードの補充もやめてしまいました。

それから八年たった一九八〇年の二月、目録の再版あるいは改訂版の話を、さる出版社から知人が持ち込んできました。度重なる要請で、いつの間にか本気になり、どうせやるなら全面改訂だとカードの補充と整理をはじめました。欧米の新刊書や古書店のカタログは保存していましたから、カードはどんどん増えます。これに一年ほどかけました。パソコンの導入も考えましたが、経済的なこと、作業の時間的なことから、原始的な手書き原稿にしました。

ところが、仕事を進めてゆくうちに、状況が変わってきました。入稿しても本になるのが怪しくなってきたのです。そこで八二年の秋、旧知の白水社に救いの手をさしのべてもらうことになりました。八三年三月に原稿を入れると、すぐに清打ちがはじまりましたが、校正はしばらくお預けとして、索引の作成を急ぎました。初版の索引は書名も事項もいっしょにしていたので、使いづらく、今回はそれを分離させました。B 7のカードを約二万枚使い、手作業で三か月かかりました。

私家版の欧文図書一九一六点が三七五二点、邦文の二五六点が八五五点、合計約四六〇〇点と件数はほぼ倍増し、ページ数も七五九頁となりました。書名は英文名が同じですが、和文は『ヒマラ

<参考資料>

- N158 Norton, Basil P. 1954 AJ 61-p.226
- F) Mémoires d'un Sherpa. An autobiography of Ang Tharkay told to Basil Norton and tr. into French by H. Delgove.
- Paris, Amiot-Dumont 21.3 x 15.7, 210p., 7 ills., 5 maps.
- Ang Tharkay's life of mountaineering in the Himalaya; early home life and humble circumstances, accounts of his five expeditions to Mount Everest and etc., and of the French expedition to Annapurna of 1950.
- N159 Norton, Edward Felix & others 1925 GJ67-p.69, obit. GJ121-p.123
- a) The Fight for Everest; 1924
- London, E. Arnold. 25 x 17, xi + 372p., 24 pl.-ills., 8 col.-pls., 2 maps.
- New York, Longman Green.
- b) Bis Zur Spitze des Mount Everest. Die Besteigung 1924. Deutsch von W. R. Rickmers.
- Basel, Benno Schwabe, 1926. 24 x 16.5, xi + 259p., 32 ills., 2 maps.
- c) La Dernière Expedition au Mont Everest. Tr. Par G. Leon.
- Paris, Payot, 1927. 8vo, 394p., i5 pl.-ills., maps.
- d) De Strijd om de Top. De jongste Beklimming van den Mount Everest. Tr. by A. Tervooeren. Amsterdam, Giltay, non-date. 8vo. 327p., ills., map.
- e) 『エヴェレストへの闘い』(1926) 川崎安治訳、あかね書房 1967, 22 x 15, 352p., 1 col.-pl., 8p.-pls., maps.
- The official account of the 3rd expedition to Mount Everest in 1924.
- Norton and Odell write the two attempts on the summit and the final tragedy, namely the first attempt by Norton and Somervell to 8534m., then the second by Mallory and Irvine who passed away eternally.
- jK165 京都新聞社編
- 『仏教東漸—シルクロード巡歴』
- 京都新聞社、1992年、A5、331 + (10) 頁。
- 1989年～90年に調査したものを91年に新聞に連載し、さらに一冊にまとめた。仏教がインドから中央アジア・シルクロードを通じて日本に至る途上の様子をルポ。大谷探検隊のことにもページをさく。
- Kyoto Shinbun-sha(ed.) 1992
- Buddhism, from India to Japan. Pilgrimage along the Silkroad.
- Kyoto, Kyoto-shinbun-sha. 21 x 14.7, 331 + (10)p., 24. col.-ills., many textills., maps. Report on the lands and peoples along the Silkroad from India to Japan through Central Asia in 1989-90. Includes the achievement of the Otani Missions to Central Asia.
- jK166 京都大学学士山岳会
- 『アンナプルナ日記』
- 茗溪堂、昭和31年、A4変形、24 + 167頁。
- 1953年秋のアンナプルナII峰南面とIV峰の遠征報告。
- Academic Alpine Club of Kyoto 1956
- Annapurna Diary.
- Tokyo, Meikei-do. 20 x 21, 24p. of photos + 167p. of text, 37 ills., 2 maps.
- Account of the expedition to Annapurna II from the south and A-IV from the north in 1953-autumn.
- jK167 京都大学学士山岳会
- 『チョゴリザ』
- 朝日新聞社、昭和34年、B5、(10) + 8 + 88 + 138頁。
- 1958年のチョゴリザ初登頂の報告。前半は写真集、後半は座談会による反省報告。
- Academic Alpine Club of Kyoto 1959
- Chogolisa. The Japanese Chogolisa Expedition, 1958.
- Tokyo, Asahi-Newspaper. 25.7 x 18, (10) + 8p. col.-pls. + 88p. of pls. + 138p. of text, 7 col.-ills., 120 b/w ills., tables, maps. With English summary paper 9p.
- Account of the first ascent of Chogolisa in the Karakorum of 1958.

ヤ関係図書目録』から『ヒマラヤ文献目録』になりました。出版社の希望と、量的にも内容が一新したからです。そして八四年一月に発行となりました。話が出てからちようど四年かかりました。発行は一〇〇〇部(そのうち外国向けが三〇〇部、洋書に準じて奥付なし)、定価は一九〇〇〇円です。のちに二〇〇部を増刷しましたが、数年かけて完売となりました。用紙は保存を考慮して、中

性紙を使用しています。

五. : Not in YAKUSHI, : , として大改訂増補の『新版』目録

白水社版がでたら、またも内外の友人たちから追加訂正の資料が送られてきました。アメリカのN・クリンチ、J・ボイル、スイスのA・ボリンダー、イタリアのF・マライーニ、スペインの山岳資料情報センターなどです。

また、欧米の古書店の何軒かは、カタログに掲載した売物の末尾に、Yakushi-Chanバーをいれて、格付けに使いはじめました。ところが、私の目録にない稀観書には、Not in YAKUSHI, : と大きく記してあります。癪にさわるじゃありませんか。そんなことから、カードの作成は続けていました。白水社版に取りかかってから一〇年ほどすると、新しいカードは四千枚になりました。中国の奥地

の登山や旅行が自由化されて、その地域の新刊書も続々と出てきます。自家用の『目録』も赤字の記入がいっぱいです。

私家版から二十年余り、第2版から一〇年をひと区切りとして、九一年八月に大増補改訂を白水社に申し入れました。その無理難題を聞き入れてもらい、九四年十一月に「新判」として刊行にこぎ着けました。索引には四万枚のカードを使い、第2版のフロッピーが保存されていなかったため、コンピュータには最初から入力されました。欧文七六〇一点、邦文一七九七点、合計九三九八点。調査の不十分さから欠番が一四〇ほど出ましたが、今回は田村俊介さんのロシア語文献を八三点加えました。一三二〇ページ、重さ二キログラムほど、ある友人にいわせると、「昼寝の枕」にちょうどよいボリュームです。第2版の約2倍です。価格も五八〇〇円、現在までに四〇〇部ほど出たようですが、なにしろ高いために、かなり残っています。

新版を出して一年ほどすると、実質二年分のカードがたまり、また、多数の訂正が出てきます。そこで今度は、自分でワープロを使い、追加訂正の冊子を九五年一〇月に作りました。B5判、一六九ページ、製本だけを業者に頼みました。追加はほとんどが新刊書で、欧文九七七点、邦文一四〇点です。

そして昨九七年十一月、雄松堂（東京）の第一回ゲスナー賞（目録・索引部門）の銀賞を受賞しました。まさに道楽事の極致というところでしょうか…。（98.3.3）

記録

北ア・剣岳山頂からの スキー滑降

高尾 文雄

（五八年卒）

一九九八年五月二・五日
メンバー…高尾文雄、加藤正一、田中博之

アルピニストを一度は目指した人ならば、剣岳は特別な思い入れのある山である。私も山スキーをやるようになって、その思い入れは変わらない。以前から複数の岳友と剣の山頂の祠からスキーで滑り降りれないかとの話をしていた。今回そのチャンスが訪れた。

五月二日 晴時々曇強風

室堂九・五〇—真砂岳二一・二〇—真砂一三・三〇

室堂から入山。例年より雪が非常に少ない。雪解けが一ヶ月以上早い感じだ。今日は足慣らしで真砂沢を滑る。

真砂岳の登りも最後は藪漕ぎになった。真砂沢は途中の滝で穴が開いていたが、スキーは最後まで滑れた。雪は良く快適に滑れた。夜から大雨と風。

五月三日 雨後曇

停滞。午後から別山沢へ散歩。

五月四日 快晴

出発六・二〇—平蔵谷出合七・三〇—インディア

ンクローアール入口九・三〇—四〇—源次郎尾根一〇・一〇—三〇—剣岳山頂一一・二〇—五〇—平蔵谷一三・〇〇—真砂一三・三〇—一四・二〇—剣沢小屋一七・一五

朝から雲一つ無い快晴。平蔵谷から源次郎尾根に滑降ルートを探しながら登る。初めはインディアンクローアールを考えていたが、途中で雪が切れていて滑降不可能。そのすぐ右に源次郎尾根まで突き上げていると思われるクローワールを見付けた。

スキーを担ぎアイゼン・ピッケルで登り始める。角度はかなり急だが、何とか雪が繋がっている。それでも一番狭いところは、スキーの長さほどしかない。雪はまだ堅いが、日がさして午後になれば、かなり緩むだろう。

源次郎尾根二峰と本峰の間のコルから一段登ったところにヒョコリ出た。源次郎尾根を上がってきた人が大勢居て、我々が急に变なところから現れたのを見付けて驚いていた。その人達と前後しながら源次郎尾根を本峰目指して登る。

本峰の祠に着いてみると大勢の人が休んでいる。我々がスキーを担いでいるのを不思議そうに見ていた。十分に休憩してからスキーの準備をする。

いま登った同じルートを滑る。祠から滑り出すが、急に落ち込んでいて下が見えない。出だしから急斜面で緊張する。尾根の上を滑るので、狭くて斜滑降は使えない。ジャンプターンでこなしていく。上からみんなびっくりして見えている。雪は堅くもなく、腐つてもいない均一なベストの状態。表面の薄い層が滑ると流れていく。絶対に転べな

いので大変緊張する。転べば直ぐ下にある岸壁を平蔵谷まで転落する恐れがある。

ジャンプターンの連続で、どんどん降りていく。途中二ヶ所雪が切れていて、そこはスキーを脱いだ。スキーを担ぎ、後ろ向きになって雪と岩のミックスを降った。

源次郎尾根から、登りに使ったクローアールを下降する。雪は予想通り緩んでいて、滑りやすくなっていた。スキーの長さ程の最狭部も難無くこなし、平蔵谷に滑り降りた。後は真砂まで、緊張から解放されて存分に滑降を楽しんだ。

これで念願だった剣岳本峰頂上からのスキー滑降は大成で終了した。

五月五日 晴

出発六・二―剣御前七・〇〇―真砂岳八・五〇―九・三―内蔵助平一〇・五〇―黒部川本流一三・一五―黒四ダム一五・三〇

内蔵助谷を滑るために真砂岳まで登る。真砂岳頂上から内蔵助谷カールに飛び込む。斜面は急ではあるが広くて、気持ちよく飛ばせる。途中の滝でデブリがあつたが、内蔵助平までは、特に問題はなかった。ここから雪が無くなり、スキーを担いで、なんと延々四時間半も歩かされてしまった。スキーは木に引つ掛かるし、兼用靴ではまともに歩けずロボットのような歩き方で、おまけに夏のような日射しで、汗だくになって黒四ダムに着いた。

以上。

ブータンの僧院火災と 再建支援活動について

月原 敏博

今年四月十九日夜、ブータンのパロ谷にあるタクツァン僧院の本堂、グル・ラカンが焼け落ちた。虎（タク）の巢（ツァン）の名をもつこの僧院は、チベット仏教関連史跡の多いブータンでも随一の名利。僧院は、五百メートル以上の高さがある絶壁の狭いテラスに建つ。この絶景は、テレビ番組や写真集などでは必ず出てくるといってよいほど有名であった。

ブータン唯一の新聞クエンセル（週刊）によると、夕方七時頃に出火、一晚中燃えつづけて翌朝鎮火した。焼け跡からは当日一人だけで留守番をしていた管理役の僧（寺男）の遺骨が発見された。警察の調べによると、状況証拠からして、寺男は殺害され、放火された可能性が強い。爆発音が二回聞かれていたが、焼け跡からの採集物からは爆発物の痕跡とも認められる化学反応があつた。火災にもつとも早く気付いたのはタクツァンよりも上方にあるザントヘルリ寺院の尼僧であつたが、その証言によると当初火は離れた二カ所から出ていた。半時間ほどはまた炎は大きくなく、その間に寺男に声をかけたが返事がなく、寺男が宝物や私財を守ろうとした形跡もなかったという。

本堂が全焼したことにより多くの仏画等が失われたが、数々の聖者・名僧が瞑想したとされる、もつとも神聖な洞穴ドゥプカンには被害はなかった。

た。また、仏画・仏像の内部に納められたナンテン、数多くのプルバ（金剛けつ）などの重要な宝物も、その多くは焼け跡から回収された。ブータン政府は、来年早々にも本堂の再建にとりかかる予定で、パロ谷の住民も全面的に協力する意志を表明している。国王は、再建のために私財を費やすほか、僧院組織に対して数多くの読経・祈祷を行うように命じた。内務大臣は、歴史的遺産である僧院やゾンの保護にいつそう注意する旨を表明した。

このニュースは、NHKなどを通じて日本でも報道されましたが、過去、京都大学からブータンへ派遣された遠征に関わった人々の中にも、この惨事を聞いて残念に思われた方は少なくありませんでした。そして、京都大学とブータンとの、これまで、そしてこれからの関係を考えると何らかの支援をすべきではないかという意見も現れてきました。そこで、栗田靖之氏と私が呼びかけ人になって、本年七月よりタクツァン再建を支援する寄付金の募集を始めました。京都大学の関係者から寄付を募り、再建に役立ててほしいとブータン政府に贈るという企画です。ブータンの政府高官に知己の多い栗田氏が本年十月頃に訪ぶる際に、内務大臣に面会のうえ、趣意書と名簿・寄付金額の一覧表を添えて寄付金を手渡す予定で進めており、すでに多くの方から賛助をいただいております。

七月の時点で案内状を送付させていただいたのは、過去、京都大学から派遣された遠征により訪ぶしたことのある方々に限られております。しかし、趣旨からしてそれらの方々に対象を限る必要

はないというご意見も聞かれますので、以上の企画に賛同される方には、ご協力いただけましたら幸いです。寄付金の振込先は次のとおりです。
郵便振替口座

口座番号：00950-5-63242

□座名：タクツァン再建を支援する会
(氏名と氏名のアルファベット表記、卒業年または続柄、寄付金額を各人ごとに明記してください。端数が出るのを避けるため、最低でも一人当り千円単位、振り込み手数料は払込人負担でお願い申し上げます。)

なお、趣意書の作成に関しては、呼びかけ人に一任していただければ幸いです。
以上、会員諸兄にご報告すると共にお願い申し上げます。

談話室

●AACCKの会報入手、私も一言書きたくなった。
私は昭和十二年卒泰安と同級、今の林野庁に入り、昭和二十九年十二月、農学部林学科の教授として京大に帰り、久しく絶えていたAACCKとの関係が復活しました。戦時中は戦争に駆り出され、山どころではなかったのですが、戦争中持っていたアネロイドバロメーターと、ドイツ製の磁石を漢口の方面軍の司令部内の井戸に沈めて、戦争を終わりました。二つとも長兄が山好きの私のためドイツから土産に買って帰ったものでした。

私は目立った山行はしていませんが、京大の教授と言うことからAACCKの会長もしばらくは務めました。戦後のヒマラヤ行には、桑原のチヨゴ

リザ以来、資金集め役をしてきました。皆よくやってくれたと思っています。中でも日中合同の登山の走りになったナムナニ峰登頂では、私は日本側の代表になり同志社と京大を総括する役目をしました。この登山は成功したのですが、京都であつた祝賀会の席上で今西と西堀にほめられたのが、記憶に残っています。彼等は「こんな混成登山隊が登頂に成功するとは思っていなかった。よくやってくれた」と、私がほめられました。私のしたことは、中国側との交渉の代表として、北京で会議をもつたことと、登頂の日、登頂した隊員の数が、日中間で違つてしまい、中国側の人数が多くなつたことに、隊長が氣遣つて、もう一隊登頂隊を出そうとしたのを、京都の本部から中国の軍用電話で直接ベースキャンプへ電話して、やめさせたこと位です。無理に人数をあわせて、遭難でも起こしたらと心配して、登頂に成功したのだから、登頂隊員の数の違いなど問題にならないから、最初の予定以外のことは止めたほうが良いと申し入れました。

AACCKの年長者が次々と死去し、私も年長者の一人になりました。元氣ですが、もう総会などは遠慮して出席していません。

(四手井綱英 山科区)

●「ガネッシュの蒼い水」をたまたま読み返し、筆をとりました。当時のKUAC遠征隊が、ミンマツェリンというシエルバを雇用されていました。彼のことで、一九六一年の大阪市大ランタン・リルン遠征隊に雇用しており、よく知っており、その彼が、今六八才で健在であることを、市大の後輩から伝えられました。トレッキングに行った後輩は、彼に会つて来ており、もう山へは登っていないこと、今ではヤクの世話をするぐらいの仕事とのこと、彼の次男がクライミン

グシエルバとしてエベレストに行っていることが等が判明しました。懐かしく思い出しています。
(藤本 勇、大阪市大ランタン・リルン第一次遠征隊員、宝塚市)

▲御連絡有難うございました。目下西北ネパールのカンティヒマール(六八五九メートル)へ遠征中とのこと、十一月に帰国される由、ご成功を祈っております。
(新井)

●日光光徳小屋六〇周年の集い(御案内)

光徳小屋は、昭和一三年に建築を始め、翌一四年に完成しました。六〇年の星霜を経て光徳小屋を愛し続けた人々に集まっていただいての簡素な記念パーティを企画しました。

平成一〇年六月一三日(土)一一・三〇より開催しますのでお集まりいただきたく、御案内申し上げます。山校友会 会長 舟橋明賢

▲東京AACCKの代表が参加されたはず。小屋のある場所が、素敵な魅力ある所で、今一度訪ねたいと思っています。おめでとうございました。
(新井)

●AACCKニュースレター用の原稿を出張先のインドよりお送り致します。原稿のご依頼は、「プータン事情の報告と、ついでに宣伝せよ」との御意向であると理解し、報道された範囲内で火災状況について報告するとともに、募金活動について宣伝する文章を書いてみました。よろしく御検討下さい。梅里に関しては出張により出勤出来ず申し訳ありません。
(月原敏博 左京区)

▲この夏は、登山史上未曾有の出来事が発生し、世間を騒がせました。冒頭の記事にみられる如く、日中遭難隊員を思い、その家族達のために、現地に駆けつけた仲間達の献身的行動には頭が下がります。事務方の皆さんにも感謝申しあげます。
(新井)

『チヨゴリザ初登頂四十周年』

記念講演会・記念パーティ

入場無料

主催 京都大学士山岳会

日時 十一月八日(日) 午後一時半より五時半。パーティ六時より。

場所 京大会館 (左京区吉田河原町十五―九 電話075・751・8311)

記念講演会

挨拶
祝辞

総司会 平井一正

京都大学士山岳会会長

上尾庄一郎

前日本山岳会会長

村木潤次郎

記念講演

「ヒドンピークとチヨゴリザ」(仮)

元アメリカ山岳会会長、ヒドンピーク隊長N・クリンチ

パネル討論

「今後の海外登山のあり方」

司会 斎藤清明

パネリスト

元日本山岳会会長、チヨゴリザ初登頂者

藤平正夫

同志社大学山岳会、アビ・サイバル初登頂者

平林克敏

AACKシシヤパンマ登頂者

松沢哲郎

神戸大学山岳会、シェルピカンリ初登頂者

井上達男

ビデオ上映

「花嫁の峰チヨゴリザ」

四時より

記念パーティ

(会費6000円)

※同封のハガキにて出欠をお知らせ下さい。

編集後記

●今夏、梅里収容隊の装備後片付け作業中、ルーム隅から「AACK 1958」と大きく書かれた古ぼけたトランクが出て来た。把手には(デンバサル行)や(クンミン行)等、フライト札が何枚も付いていた。開けてみると何と梅里遭難隊員の装備が入っていた。このトランクはチヨゴリザから四〇年間も種々の遠征に使用され、最後は何らかの理由でルームに残ったものと思われる。数奇なトランクではある。本号が、これからのAACKの出発点になればと願っている。

(竹田晋也)

●発行が遅れたが、最新のトビックスを掲載し得たので了解願えると思う。

又、AACKホームページも充実してきたと聞く。併せご利用を願う。

引き続き皆様の発信をお待ちしております。次号の原稿締切りは、十一月二〇日です。

(新井 浩)

編集委員 新井 浩、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 一九九八年九月三〇日

発行所 京都大学士山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株)土倉事務所